

下野市立古山小学校

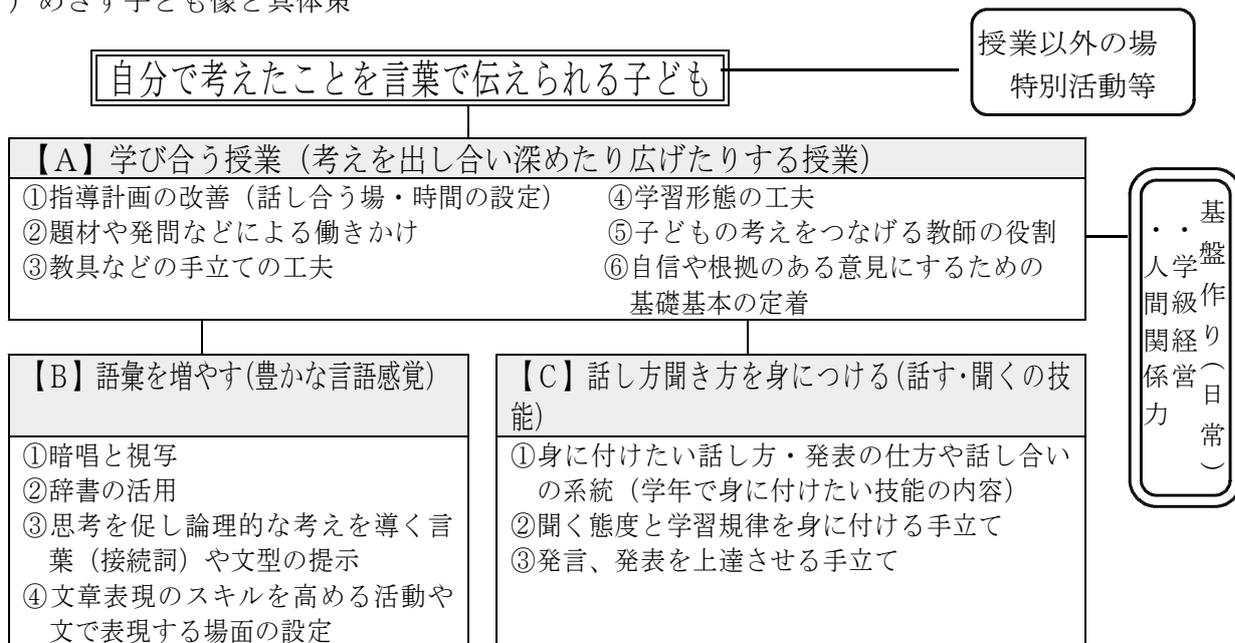
1 学校課題

表現・コミュニケーション能力の育成をめざして
～言語活動の充実と、学び合う授業づくりを通して(4)～

2 本年度の研究について

昨年度に引き続き、上記のテーマで算数での授業改善を柱に課題研修に取り組んだ。

(1) めざす子ども像と具体策



本年度は、研究を進める上での視点を次のように設定した。

- 視点1 自分で考えたことを表現できる子どもの育成を目指すための工夫
- 視点2 学び合う学習指導の工夫

(2) 研修の進め方

- 3回のS&Uコラボ研究授業を柱に実践的な研究を進める。なお、S&Uコラボ事業のうちの1回は「実践的コミュニケーション能力の育成」と題して、講話と演習を行う。
- 各学年の研究授業に当たって低中高ブロックごとに指導案検討会を運営し、発達段階や指導の系統、児童の実態などを検討し合い課題解決を図るとともに、普段の指導に生かしていく。
- 学校課題研修の授業研究会以外に、共同訪問での公開授業の機会が予定されていた。それらの場においても、算数での学校課題研修の成果を生かす機会ととらえて授業研修を行う。

(3) 授業研究

月 日	研究授業	指導助言者（☆はS&Uコラボ事業）
7 / 1	5年算数「合同な図形」	☆宇大教育学部教授 日野 圭子 先生
12 / 9	2年算数「かけ算九九づくり」	☆宇大教育学部教授 日野 圭子 先生

*ワークショップ

7 / 29	実践的コミュニケーション能力の育成	☆宇大教育学部准教授 森田香緒里先生
--------	-------------------	--------------------

3 研究内容

(1) 5年算数「合同な図形」授業研究会

○具体策A [学び合う授業 (考えを出し合い深めたり広げたりする授業)] を中心に授業研究。

【A-② 題材や発問などによる働きかけ】伝言ゲームを取り入れた作図を行うことで、合同な三角形の作図に必要な構成要素を考えるとという必然性をもたせた。また、ゲーム形式にすることで、



子どもたちが興味関心をもって取り組める算数的活動を取り入れることができた。

【A-④ 学習形態の工夫】グループ活動を行い、少人数での活動を取り入れることで、自分の考えを発表しやすい場を設定したことにより学習成果が得られた。また、T・Tによる指導を取り入れることにより、子どもへの声かけを増やすと共に、個々の到達度やつまづきを評価し、よりいっそう個別指導ができた。また、個々に問題解決した後で意見交換をし、児童は、お互いの理解度や考えの違いを確かめながら活発に話し合い、グループで課題解決を図っていた。児童間の「聞く・話す」表

現力が学習形態を工夫する中で育ってきていることを見ることもできた。

【A-⑥ 自信や根拠のある意見にするための基礎基本の定着】既習内容が身についているかどうか、自力解決の基礎となる内容の復習プリントを作成し確認をした。特に作図問題は、作図の手順及び用具の使い方を確認し、継続的に家庭学習等で取り組ませることにより習熟を図ることができた。

(2) 講話 ワークショップ 「実践的コミュニケーション能力の育成」

宇都宮大学教育学部 准教授 森田香織里先生

○森田先生は宇都宮市の「会話科」において上記の研究を進めていく中で、実践的なコミュニケーション能力を育てるためには、「能動的に聞く力」の育成が重要であることを見いだした。なぜこの力が必要かという、今の児童は親切なメディアの中で生きているため、集中して聞き取る力が弱い傾向があり、聞かないと困るという状況がなくなってきているからである。

そして、「能動的に聞く力」を伸ばすためには、受動的に聞くのではなく、聞いたことを生かす、目的をはっきりとした活動を取り入れることが大切である。また、会話をしないと先に進まない必然性と、会話の必要性の確保が重要である。という2つ重点を見出した。

また、各学年の発達課題に照らし合わせていくと次のような能力が必要となる。

低学年 黙って聞く、再現する力

中学年 大事なこと、話の中心や話す人の思いに気をつけて聞く「相手意識」

高学年 自分の言葉に言い換えて聞く「言葉の反復ではなく言い直す、まとめ直す、抽出して聞く力」

今後の方向として、知識として得たことを自分の言葉で組み替え表現したことが学力として見られることや、ヨーロッパでは、アウトプットできないと理解しているとは見なされないことなどを考慮していくことが必要であろうと力説されていた。算数科等における表現力の育成の大切さを考える上での一助となる講話であった。

(3) 2年算数「かけ算九九づくり」授業研究会

○具体策B [④思考を促し論理的な考えを導く言葉 (接続詞) や文型の提示] を中心に、授業研究を行った。自分の考えをまとめたり交流し合ったりするために、発達段階に応じた算数的用語 (まともり・□のいくつ分・かける数・かけられる数等) を使ったり、接続詞 (はじめに・つぎに・最後に等) を使ったりできるように、用語の指示を示した。全体やペアでの話し合いに生かしたために、内容をわかりやすく伝えることができた。また、友人の説明を聞いて、自分の考えと比較し考えを深めたり、新たな方法を見い出したりすることができた。

4 今後の課題

○今までは学校課題の評価を、授業研究会や標準学力テストの結果を中心に行ってきたが、今後はもっと幅広く多くの面から評価していくことが必要である。たとえば、学習を支える集団としての学級の姿のとらえ方、家庭学習のあり方等を評価するための方法などが考えられる。また、指導に当たる教師の力量をつけていくための授業研究会をさらに増やしたり、現職教育の研修にも力をいれていくことが必要である。